そして、一人で辞めるのも勿体無いから、知っている信者さんの家を一軒・歩いて、「ここの教団は、おかしいから辞めなさいよ」って言って回ったんですね。

そうしたら、すっかり睨まれましたね。（笑）私はそんな事、気にしなかったけれど、もう睨まれましたね……。

分かった以上、一人だけ抜けるのは申し訳無いと、そう思った訳ですよ。（笑）

しかし、これは間違いですね。自分がそう思ったからといって、人に押し付けたら、これはいけませんね。これじゃあ、教団側の商売の営業妨害になりますよね。（笑）

そして、とうとうそこを辞めてしまったんですね。

## 五、出会い――質問する前に　先に答えを言われる

そしてその時に、教団の中で私と一緒にやっていた人が、突然大勢で教団を辞めた訳ですよ。それで、「何故、辞めたんだろう」と、またその時、疑問に思った訳です。



そして、その辞めた人の家に聞きに行ったんですね。

「あなた達は、何故辞められたのですか？　ただ辞めた訳じゃないでしょう。その理由を教えてくれませんか？」

「いやぁ、ちょっと教えられません」

教えられないって、そんな阿呆な事は無いと、

「じゃあ、教えてくれるまで帰りませんよ」

と、何時間も粘って粘って、漸く聞き出したんですよ。（笑）

そうしたら、浅草に高橋信次という立派な方がいて、人間についていろんな話をしているということが分かった訳です。

高橋信次先生という方は、ミニコンピュータの端末機を製作している会社の経営者だったんです。また、科学者でもあり、特許を何千と持つ発明家でもあったんですね。

小さい時から、「人間とは何だろう。何かあるんじゃないのだろうか」と追求してきた人なんですね。

それで、電気の事を勉強するようになった時に、この世とか、あの世とか、人間

の魂について、「この電気を追求していけば分かるのではないか」と思われたんですね。そしてまた、天文学・医学も勉強していったんです。

そして、とうとうこの電気で発見することが出来た訳です。

電気はプラス・マイナスで回っていく――そういう事を追求していったら、「人間には肉体と光子体（魂を包んでいる光の体）というのがあって、その二つで動いている」ということが分かったんです。

そしてそれを多くの人の前で話をしながら、いろんな証明をしていったんですね。

私は、昭和四六年の四月一三日に、高橋先生の事務所に行ったんです。そして先生にお会いしたんですね。

丁度その頃、高橋先生は、多くの人の個人相談をしていらっしゃったんです。

先生は自分の仕事のコンピューターの会社がある訳ですから、その会社の段取りをして、昼頃になったら必ず出て来て、皆さんの相談相手をしていらしたんですね。

行ったら、その日に直ぐお会い出来た訳ですよ。その日は、もう朝早く起きて、九時になるのを待って、さっさと家を出て行った。そして受付の方に、



「先生がみえたら、会わせて貰えますか」

と言って、何時間も待っていたんですね。

そうしたら、先生がみえて部屋に通された、

「やぁ、いらっしゃい。さぁ、どうぞお掛け下さい」

「はい」

と、言ったは良いんですけれども、お掛け下さいって、えらい低姿勢なんですね。

とにかく、そういう事をやっておられる方ではないような、言葉も仕草も本当に丁寧な人なんですね。

私に高橋先生を紹介してくださった方は、先生にも会っていて、いろんな事を知っておられる方なんです。その方から教えられていましたから、私も人生についての、これまでの様々な疑問を――こういう事を質問しよう、あゝいう事を聞こうと――前の日に箇条書きに、一〇項目位メモをして行ったんですね。

「どうされました？」

「あのう、実は……」

――あのうの後、先生の方からズーッと喋り始めたんですよ。
聴いていたら、何処かで聴いたような話。どうも私が質問しようと思っていた事を話しておられる。「あれーっ？」と思いながら、またよーく聴いてみたら、自分がメモに書いてきたものを、そのまま順を追って、次々に話をしている訳ですよ。
「こうですよ。あゝですよ。人生とはこうですよ。あなたは今までこんな事を思ってきて、こんな事をしてきましたね。そして今こうなっていますよ。あなたは、こういう疑問を持っていますね。こういう理由でここに来ましたね」
と、もう全部言われる。
「おかしいなぁ、この人、私の書いたメモ見たのかな？」って、私は心の中で一所懸命に思ってる訳ですよ。（笑）
先生の前に腰掛けているから、メモしたのが見えるんじゃないかと思ったりしたけれども、見える訳がないんですね。（笑）
「何故、こんな事が分かるのだろう？」と思いながら……しかしその時は、もう心臓が、ドキッ！ ドキッ！ としている訳ですね。



自分が尋ねようと思っている事を、先に全部言われる訳ですから……。
さぁ、今度は心臓がタッタッタッ……と止まらない。「これは、大変な人に会ったぞ」と思った訳ですよ。「これは……えらい処へ来てしまった」と思いましたね。
「あなたは、こういう処が悪い。こんな事もしましたね」
――過ぎた事を全部言われる訳ですよ。しかも、私しか知らない事まで……。
「これは、またえらい事になった」と思ったけれども、しかし、「この方の仰る事は、本当だ」とそう思いましたね……。
そして、一番最後になって、
「あなたのポケットの中には、こういう物が入っている。こういう物も入っている」
と段々言われて……これは大変ですね。で、終いに、
「あなた、ここに（胸に）変な物を下げてますね」
って言われたら（笑）、もう大変ですよ。ペンダントは服の下ですから、見える訳がないんですけど、「どうやって見えたのかなぁ」と胸を見ながら考えている。（笑）
「あなた、そこに下げてる物、出してご覧なさい。その中に何て書いてあるか分かり

ますか？」
「いやぁ、分かりません。これはもう、大変なものだと言われております」
「それ、出してご覧なさいよ。中身がどんなものか見せてあげますよ。出したくなけりゃあ、結構ですけどね」
と、そう言われたらもう、
「いや、出します、出します」（笑）
——私は教団を辞めようと思っていますから、胸のペンダントをサッと外して渡したんですね。
そうしたら、「開けますよ」って、パチンと開けて見せてくれたんですよ。
丸い中に和紙があって、そこに小さく、チョンと書いてあるだけなんですよ。
「これが神さんですよ。あなた、これ神さんなの？」
そう言われてみると……尤もですね。人に言われたから、「これは神様だ」というのも、何だかおかしい。
「あなたね、うちの会社の工場で、これ造ったら二〇円位で出来るよ。あなた、これ幾らで買ったの？」
——もう言われちゃって……。（笑）もう何にも言えなかったですね。
「わたし、それ要りません」
「要りませんって、あなた、私のとこに置いていってどうするの……」（笑）
「いや、要らないです」
そう言って先生の処に置いてきちゃった訳ですよ。（笑）
その頃は、個人相談の人は、一人三〇分位だったんですね。ところが、二時間も私に話をされた。二時間——。私はこの帰る間際になるまでは、始めにあのうと言ったっきり……。（笑）帰りに先生が、
「私は何時も、週に一回土曜日に、会社の仕事の時間が終わった後、六時からお話をさせて貰っていますから、良かったら聴きにいらっしゃい。そこに私の書いた本もありますから、もし良かったらそれを買っていって読んでご覧なさい」
と仰った。その頃先生は、本を二冊書いておられたんですね。
『縁生の舟』（改題／心の発見）の神理篇と、『天使の再来』（絶版）の二冊。値段

の事を言えば変ですが、あの頃は、六〇〇円と三〇〇円ですよ。本を買って帰った。

この、たった九〇〇円で、私の人生というものは、ガラッと変わってしまった訳ですね。

しかしその日は、とにかく家に帰る間も、まだドキドキ……止まらない。もうどうしようもならなかったんですね。先生の事務所から出て、もう電車に乗ったんですから収まりそうなものですけど、収まらない。家に帰っても収まらないんですよ。

「一体、これはどうなったんだろう」と、思った訳ですよ。余程、吃驚したんですね。

丁度、五〇歳の時だったんですね、高橋信次先生という方にお会いしたのが――。

それから毎週、先生の講演を聴きに行くようになったんですね。

次回に続く――次回更新予定は、二月中旬頃です。